

神になつた竹富島の偉人

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

石 垣島の南西六キロメートルにある竹富島は、隆起サンゴ礁で出来た周囲九キロメートルの小さく平らな島だ。石垣島の離島フェリーターミナルから、高速フェリーに乗ると一五分ほどで着いてしまう。人口約三五百人。人の集落は、島の中央に集中しており、家のほとんどは赤い琉球瓦の寄棟造りで、サンゴ石灰岩の石塀でかまされ、道路に敷き詰められた白いサンゴ砂は青空によく映えて美しい。この集落は、沖繩の古き景観を残していることから重要伝統的建造物群保存地区に指定され、サンゴ礁の白い砂浜と青い海とともに島の貴重な観光資源となっている。

集落内は観光用の水牛車が巡回しており、のっそりのっそり通り過ぎるのをやり過しつつ歩いていると、公民館の前に御嶽（沖繩における聖域で、神が宿る、または来訪すると信じられている場所をいう）があった。竹富島の御嶽は、うっそうとした樹木に囲まれているのが多いが、この御嶽は島の家屋と同じ琉球瓦のお社なので、言葉が通じる神様が祀られているような印象を持ったが、案の定、坐す神は西塘という竹富島の偉人だった。

塘は將軍に連れられて、沖繩本島の首里へと上り、琉球国の宰相の下で奉公することとなった。西塘は、よく仕え、よく学び、一五一九年には首里城近くの園比屋武御嶽石門の建設を任されるまでになった。伝説によれば王が臣下の屋敷へ向かう途中、この御嶽の前で一人の老翁が現れ、逆心を抱く者がいると神託をくだした。果たして、訪ねようとした臣下の企みが露見し、難を逃れた王は、外出の際には必ずこの御嶽を拝礼することにしたという。このように重要な御嶽の石門を任されたことから見ても、西塘の石造技術は、よほど巧みだったようだが、彼がいつ、どこで、誰から学んだかはわからない。

一八四六年のこと。竹富島では、害虫が発生して作物が食い尽くされた。この時、神事を司った老人が神がかりして、西塘の使いを名乗り、害虫駆除の祈願祭を求めたという。災いを鎮めるために祀りあげられるのは、崇り神によくあることで、くわえて一族が悲運の最後を遂げたという伝承もあることから、政争に敗れた可能性もあり、故郷に錦を飾った後の生涯は、幸福ではなかったのかもしれない。



西塘御嶽の碑

[交通]竹富島集落のほぼ中央、公民館前

※碑文の全文は日建連HPに掲載しています。

石門を建設した後、西塘は長年にわたる忠勤を認められ、一五二四年に竹富島への帰郷を許されたばかりでなく、石垣島をはじめとする八重山諸島の行政を司る武富大首里大屋子に任じられた。ただし、竹富島では、西塘は首里城の城壁をも建設したと伝えられており、これが事実だとすれば、一五四四年から四六年の城壁拡張工事に関わった可能性もあるとして、帰郷は一五四六年以後とする説もある。

ところで、西塘は竹富島の偉人だから、神になつたのかと思いきや、崇り神として祀られたようなふしがある。西塘存命の時代から、はるかに降つた

西暦一五〇〇年、石垣島を拠点に勃発した反乱を鎮めるために、琉球王府から派遣された將軍が、竹富島で西塘という一人の聡明な若者を見出した。西